

古事記と近親相姦

Kojiki and Inter-marriage

村上史展*

Oka Masao⁽¹⁾ dealt with the incestuous union motif in the Izanaki-Izanami myth, exemplifying brother-sister incestuous union myths in many parts of Southeast Asia. Although criticized by many scholars, his supposition has been supported by Saigō Nobutsuna⁽²⁾ and Ōbayashi Taryō.⁽³⁾

This paper studies the meaning of the incestuous union myths in the Kojiki and supposes that the ancient Japanese people might have believed their parent's souls could revive in their children's bodies by means of the brother-sister incestuous union.

On the basis of the above supposition, this paper puts forward the hypotheses on the questions such as why Amaterasu is called "Kōshoshin (ancestor of the imperial family)" instead of her parents Izanaki and Izanami, why Takamimusubi suddenly appears with Amaterasu in the story of "Amaterasu's grandson descended from the heaven", and why Ho-no-ninigi, Amaterasu's grandson, descended from the heaven instead of Oshi-ho-mimi, Amaterasu's son.

Moreover, this paper points out the difference between the myths of Takamano-hara sequence and those of Izumo sequence from the viewpoint that the former have the sacred re-birth as a result of the incestuous unions, whereas the latter do not have.

Lastly, this paper mentions the change of the ancient Japanese self identity

* MURAKAMI Fuminobu, シンガポール国立大学講師

from the concept of the body where the souls of their ancestor's revive to the concept of their own selves which live and die in this world.

Foot Notes:

- (1) Ishida Eiichirô, Egami Namio, Oka Masao, Yahata Ichirô, Nihon minzoku no kigen, Heibon-sha, 1985.
- (2) Saigô Nobutsuna, "Kinshinsôkan to shinwa-Izanaki Izanami no koto", Kojiki kenkyû, Mirai-sha, 1973.
- (3) Ôbayashi Taryô, Nihonshinwa no kôzô, kôbun-dô, 1975.

1. 近親相姦

岡正雄氏は『日本民族の起源』⁽¹⁾の中で、古事記に描かれているイザナキ・イザナミ神話の原形に近親相姦モチーフを指摘されております。洪水襲来のために人類が死滅し、生き残った兄妹が近親相姦によって子孫を生み、種族の祖神となるという神話が東南アジアなどに多く存在していることから類推して、イザナキ・イザナミ神話の原形として、そうした洪水型兄妹相姦神話の断片を見たのであります。その後、西郷信綱氏は「近親相姦と神話 —— イザナキ・イザナミのこと —— 」⁽²⁾の中で、イザナキ・イザナミの近親相姦を認められ、それに関して次のように述べております。

私の言いたいのは、日本の古代社会には兄と妹との紐帯がまだ強く生きていたこと、そしてイザナキ・イザナミという神話上の最初の夫婦が兄妹であるのは、この紐帯の神話的象徴化にほかならないという点である。

一方、大林太良氏は、『日本神話の構造』⁽³⁾の中で、イザナキ・イザナミだけでなく、アマテラス・スサノヲの間にも近親相姦を認められ、族外婚が語られるのはオシホミミとトヨアキツシヒメとの結婚以後であり、そこで初めて永続的な支配権が確立することを指摘されて、次のように述べられます。

原古に天上で行なわれた性の試行錯誤の結果確立した異血のもの同士の結婚という範型にのっとり、現在の地上の人間は結婚を行なわなければい

けない。結局、この神話はそういうことを、言っているのではないか、と考えられるのである。

古事記の中には、これらの他にも、サオビコ・サオビメ、アヂスキタカヒコネ・タカヒメ、木梨軽之皇子・軽太郎女など、兄妹でありながら夫婦であるらしい関係が多く語られております。本発表は、こうした関係が何を意味しているかを考察しようとしたものであります。

2. 復活

古事記によりますと、イザナミの死後、黄泉国から逃げ帰って来たイザナキは日向で身禊をして、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲの三貴子を生むのですが、日本書紀の本文では、三貴子はイザナキとイザナミの生殖によって誕生したことになっております。津田左右吉氏は『日本古典の研究』⁽⁴⁾の中で、日本書紀の本文が原形であろうと推測されておりますが、としますと、このアマテラス・ツクヨミ・スサノヲははっきりと、イザナキ・イザナミという兄妹から生まれた子となるわけです。

一方、村松武雄氏は『日本神話の研究』⁽⁵⁾の中で、黄泉国におけるイザナキの死体覗き見死者の復活を祈る殯宮の葬礼の反映であることを指摘されております。実際に古事記の中ではイザナミの復活は語られませんが、この神話の根底にはそうした復活を祈る願望を認めてよいとおもわれます。そうしますと、このイザナキ・イザナミ神話全体の中に、イザナキとイザナミという兄妹が結ばれることによって、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲという三貴子が生まれ、その後、陰上を焼かれて神退ったイザナミは殯宮で復活を祈られるという構造が浮かび上がってきます。私がここで注目したいのは、兄妹が結ばれるということ、そして、聖なる誕生が語られるということ、さらに、その後、母の死と復活の祈りが語られるという四つの要素であります。この四つの要素はアマテラスとスサノヲの宇気比神話から天岩屋戸籠もり神話に至る中で、再び繰り返されるのであります。

そこで、アマテラス・スサノヲ神話であります。スサノヲは高天原に上り、天の安の河でアマテラスと物実を交換して子を生むのでありますから、ここにまず姉と弟が二人で子を生むという神話が語られていると言えます。さらにその後、スサノヲは高天原で数々の悪行を働くのであります。その中に忌服屋に天の斑馬を逆剥ぎにして墮し入れ、それに驚いた天服織女が梭に陰上を突いて死ぬという話があります。日本書紀本文のこの話ではアマテラス自身が傷ついたとあることから、折口信夫氏⁽⁶⁾・松村武雄氏⁽⁷⁾等は、この神話の原形で傷つき死んだのはアマテラス自身であろうと、推測されております。としますと、ここでも姉弟が子を生んだ後、姉は陰上を突かれて死んだという話が想定できます。そしてさらに問題はこの宇気比によって、ホノニギの父であるオシホミミと、アヂスキタカヒコネの母であるタキリビメという重要な神が誕生していることであります。

一方、松村武雄⁽⁸⁾・西郷信綱⁽⁹⁾氏等は、その後の天岩屋戸籠もり神話が鎮魂祭と大嘗祭の反映であろうと指摘されております。それは、死んで遊離しかけた靈魂を取り鎮めて肉体にとどまらせる呪法であり、また一旦死んで復活することによって、新たな生命として生まれ変わるための呪法であります。としますと、ここでも、アマテラスの死と復活が語られていることになります。

こうして見ますと、イザナキ・イザナミ神話と、アマテラス・スサノヲ神話の中では、同じパターンで、兄妹・姉弟の結びつきと、誕生、死、そして復活が繰り返して語られているのであります。

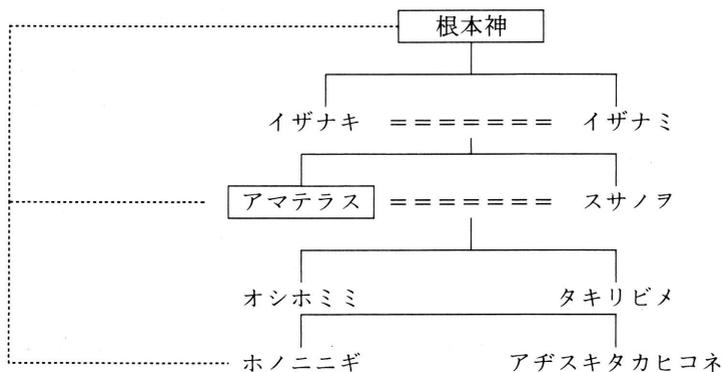
これが何を意味しているかということに対する私の推測を申し上げます前に、もう一つ別な角度からこの問題を眺めてみたいと思います。

柳田国男氏は、「先祖の話」¹⁰⁾の中で、沖縄では長男には祖父の名を、長女には祖母の名を付けるのが通例となっていたと紹介されて、「祖父が孫に生まれて来るということが、あるいは通例であった時代もあったのではないかと推測されたことがあります。柳田氏は、「しかしこれでは少し早きに過ぎて催促せられる気味がある。」と否定的な見解を付け加えられましたが、それまで

祖先の霊が宿っていなかった孫の肉体に、祖父母の死後、その霊が宿りを変え
ると考えることも充分あり得るのではないかと思います。

一方、折口信夫氏は、「上代葬儀の精神」⁽¹¹⁾の中で、天皇の呼称である「す
めみまの命」の「みま」は孫の意味であると指摘されております。しかし、折
口氏は祖先の霊が子孫に宿ると考えられ、この「みま」の意に関しましても、
「身体」というもう一つの意味を取られて、「天皇霊の宿る御身体」と解された
のであります。オヤが祖先一般を、孫が子孫一般を指すと考えるほうが妥当な
のではありましようが、私は、例えば天皇家において、祖先の霊を「天皇霊」
として一般化し、大嘗祭においてその「天皇霊」を身にまとして新たな天皇と
して生まれかわると信じられていたというより、もっと具体的に、祖父母の霊
がその孫に宿ると考えられていたのではないかと思います。そして、
そこからさらに、自らの亡き父母の霊の復活を願って子を生むという考えが古
代人の中にあっただのではないかと思います。

とすれば、それをこの古事記の神話に重ねてみますと、兄妹、あるいは姉弟
の結びつきは、父母の霊を最も純粋に、新たに生まれる子供の肉体の中に復活
させることができるという考えがあっただのではないかと思います。即ち、イ
ザナキ・イザナミは彼等に生命を与えた根本神の復活を祈って兄妹で結ばれ、
アマテラス・スサノヲもまた、その父母、イザナキ・イザナミの霊の復活を祈
って姉弟で結ばれたのではないかと思います。



系図 1

もし、こうした推測を許していただけるなら、いくつかの疑問を解くことができます。まず、かつて津田左右吉氏は、『日本古典の研究』⁽¹²⁾の中で、皇祖神アマテラスには何故父母がいるのか、イザナキ・イザナミは何故皇祖神と呼ばれないのかという疑問を提出されたことがあります。津田氏は、高天原系の祖アマテラスと出雲系の祖スサノヲとを姉弟とするために父母が必要になったという、政治的な意味をこの神話の深層に見ることによって、その間に解答を与えられたのですが、先に申しました推測を考慮しますと、ここにもう一つ別の答えが考えられます。それは、アマテラスがもし、イザナキ・イザナミの兄妹婚によって、二神に生命を与えた根本神の復活した姿であるとするならば、まさしく皇祖神と呼ぶにふさわしいではないか、ということであります。そして、このイザナキ・イザナミの子としての面と、根本神の霊の復活としての面は、アマテラスという神の中に初めから混在していたと考えるよりは、何かを契機としてその祖父母の霊を身に纏うと考える方が妥当であろうと思われまゝ。そして、その契機とはおそらく天岩屋戸籠もり神話におけるアマテラスの死と復活なのであると思われまゝ。

また岡正雄氏は、『日本民族の起源』⁽¹³⁾の中で、天孫降臨神話において、タカミムスビがアマテラスと並んで登場してくることから、タカミムスビを中心とする神話と、アマテラスを主神とする神話とは元来別の神話系のものであろうと考えられ、前者の原形を降臨神話を中心とする北方系神話に、後者の原形を天岩屋戸籠もりを中心とする南方系神話に求められたことがあります。確かにそれまで、イザナキ・イザナミからアマテラス・スサノヲへとつづいてきた系譜に天孫降臨以後、突然一世代前のタカミムスビがアマテラスと並んで登場してくるのは不可解であります。しかし、おそらくその意味もこのアマテラスの死と復活により関係があるのではないかと思われまゝ。即ち、アマテラスは天岩屋戸籠もりにおいて、一旦死んで復活することによって、その祖母の霊を身につけて、タカミムスビと同次元の世界へと戻ったと考えると納得できると思われます。

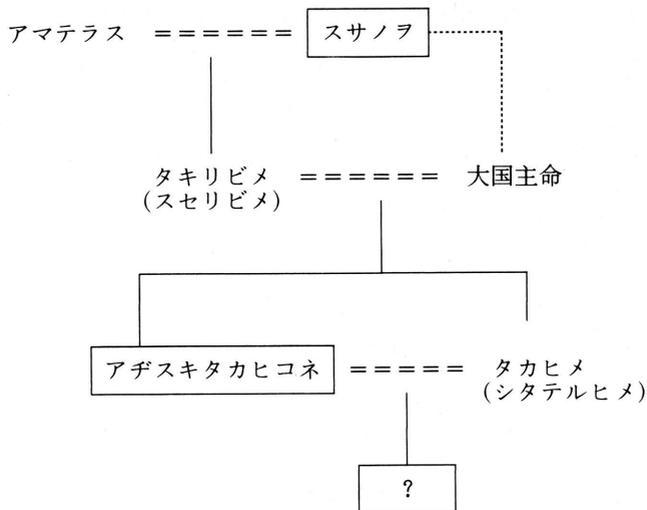
さらに、オシホミミではなく、あえてホノニギが降臨するのも、やはりホ

ノニニギがアマテラスの孫として、アマテラスの霊を宿しているからだと思います。

ここまですら簡単にまとめさせていただきますと、イザナキ・イザナミはその父母の霊の復活を祈って兄妹で結ばれて、アマテラス・スサノヲの聖誕を導き、その際、陰上を焼かれて神退ったイザナミは殯宮において復活を祈られますが、その復活は語られません。それはおそらくこの神話の構造において、イザナミは復活すべき祖父母の霊を持っていないからだろうと思われます。また、アマテラス・スサノヲは姉弟で再び結ばれることによってイザナキ・イザナミの霊の復活としてオシホミミ・タキリビメの聖誕を導き、その際、アマテラスは陰上を突かれて一旦死にますが、鎮魂祭・大嘗祭儀礼によって復活し、その祖母、根本神の姿へと舞い戻り、一方、タカミムスビの子、トヨアキツシヒメとオシホミミとの間に生まれたホノニニギは、根本神からアマテラスへと受け継がれた霊を身にまとして、高千穂の峰に降臨してくるのです。

3. 聖誕

この兄妹婚、あるいは姉弟婚に注目いたしますと、高天原系神話だけでなく、出雲系神話の中にも同じモチーフを見出すことができます。ここで私が取り上げたいのは、スサノヲ、アヂスキタカヒコネとタカヒメ、そしてホムチワケノ御子であります。アヂスキタカヒコネとタカヒメは、スサノヲの子孫、大国主命と、天の安の河における宇気比で、スサノヲの物実から生まれたタキリビメとの間に生まれた兄妹であります。即ち、スサノヲ・アマテラスと、アヂスキタカヒコネ・タカヒメ（シタテルヒメ）とは祖父母と孫の関係にあるわけです。そこで、このアヂスキタカヒコネ・タカヒメ（シタテルヒメ）はスサノヲ・アマテラスの霊を宿しているのではないかと推測できます。



系図 2

このタカヒメの別名である、シタテルヒメはアマテルヒメとの対でありますし、また、古事記においてスサノヲが、「八拳須心前に至るまで、啼き伊佐知伎」と表現されているのと同様に、風土記においてアヂスキタカヒコネは、「御須髪八握に生ふるまで、夜昼哭きまして、み辞通はざりき」と表現されていることはよく知られております。さらにこれと同様の行為は後の垂仁天皇の御子、ホムチワケにも見られまして、そこでは、「この御子、八拳鬚心前に至るまでに真事とはず。」と記されております。この三者の「啼き伊佐知」という行為は、高崎正秀氏⁽¹⁴⁾・松村武雄氏⁽¹⁵⁾・守屋俊彦氏⁽¹⁶⁾等によって、一種の神降しの行法、または、死した魂を呼び生かさんとする呪法ではないかと推測されております。

このスサノヲ・アヂスキタカヒコネ・ホムチワケの三者に共通しておりますのは、この「啼き伊佐知流」という行為と、三者とも出雲系神話であるということと、そしてもう一つ、兄妹婚、あるいは姉弟婚が三者の周辺で語られるということでもあります。スサノヲの「啼き伊佐知」の理由は、「僕は妣の国、根の堅州国に罷らむとおもふ。かれ哭く」というものであり、亡き母を偲んで泣いているわけでもあります。その後、スサノヲは高天原に上り、姉アマテラスと

の宇気比によって、父母の霊の復活としてのオシホミミ・タキリビメを生むのであります。また、このスサノヲの孫、タキリビメの子である、アヂスキタカヒコネとタカヒメにも中西進氏⁽¹⁷⁾・高崎正秀氏⁽¹⁸⁾等は兄妹であり、夫婦であるという関係を想定されているようでありますし、さらに、ホムチワケは垂仁天皇とサオビメの子として語られますが、このサオビメと兄のサオビコとの間は、これも兄妹であり夫婦であると思われる。としますと、この「啼き伊佐知」という三者に共通した呪法も、単なる死者の復活を祈る呪法ではなく、もっとはっきりと、兄妹あるいは、姉弟の結びつきによって、父母の霊の復活を祈る呪法ではないかと思われるのであります。しかし、これらの出雲系神話におきましては、アヂスキタカヒコネとタカヒメにしましても、サオビコとサオビメにしましても、兄妹の結びつきの片鱗は垣間見られるのであります。その結果としての聖なる誕生は語られないのであります。そこが高天原系神話との大きな違いであります。

4. 死

最後に指摘させていただきたいのは、古事記において、上巻の高天原系神話では、兄妹の結びつきが、祖父母の霊の復活として聖なる誕生を導くものとして語られているのであります。それが中・下巻になりますと、サオビコ・サオビメにしましても、木梨軽之太子・軽太郎女にしましても、兄妹の結びつきは反乱と死罪とに深く関係しております。それが一体何を意味し、何を語ろうとしているのかということでもあります。それを近親相姦の禁止とか、自然から文化へと移りゆく歴史的発展に置き替えて理解することも可能であります。この兄妹あるいは姉弟の結びつきが父母の霊の復活としての聖誕を導くものであったと考えますと、それを禁止するということは、即ち、祖父母の霊の復活を禁止するということにつながると思われます。自己を祖父母の霊の復活として意識するということは、そこに祖先から自己へ、自己から子孫へと永遠に流れていく生命を獲得することであり、また祖先を同じくする人々にとりましては、相互の同一性を確認することであったと思われます。従いまして、ここで

祖父母の霊の復活を禁止するという事は、そうした永遠の生命、相互のつながりを捨て去ってまでも、現世に生き、そして死んでいく人間を認識したということではないかと思われます。そして、ここで犠牲にされた、永遠の生命と人々の共通性というつながりを保存しているのが、天皇の系譜ではないかと思うのです。大嘗祭において天皇は一旦死んで、再誕することによって、祖先の霊を身にまとして人々の前に現れるのであります。それは、捨て去った永遠の生命という祖先の霊を天皇という一つの系譜の中に保存しようという願いであり、また、その霊につながるものとしての人々の共通性を確認しようという願いであったと思われます。

- 注 (1) 石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎『日本民族の起源』平凡社 1958年 45ページ、232～233 ページ。
- (2) 西郷信綱『古事記研究』未来社 1973年 78ページ。
- (3) 大林太良『日本神話の構造』弘文堂 1975年 15ページ。
- (4) 津田左右吉『日本古典の研究』岩波書店 1948年 上巻 368～369 ページ。
- (5) 松村武雄『日本神話の研究』培風館 1954～1957年 第二巻 445～448 ページ。
- (6) 折口信夫「上代葬儀の精神」『折口信夫全集』第二十巻 中央公論社 1956年 353～354 ページ。
- (7) 松村武雄前掲書 第三巻 43～45ページ。
- (8) 松村武雄前掲書 第三巻 76～91ページ。
- (9) 西郷信綱「大嘗祭の構造」『文学』(岩波書店) 1965年12月、1966年 1月、後に、『古事記研究』に再録。
- (10) 柳田国男『新編柳田国男集』第五巻 筑摩書房 1978年 380ページ。
- (11) 折口信夫前掲書 356～357 ページ。
- (12) 津田左右吉前掲書 上巻 382～383 ページ。
- (13) 岡正雄前掲書 45～48ページ。

- (14) 高崎正秀『文学以前』桜楓社 1958年 155～168 ページ。
- (15) 松村武雄前掲書 第二卷 614～615 ページ。
- (16) 守屋俊彦『記紀神話論考』雄山閣 1973年 127～149 ページ。
- (17) 中西進『古事記をよむ』角川書店 1985～1986年 第二卷 30ページ。
- (18) 高崎正秀前掲書 290、309～310 ページ。